

斜面地の住環境の実態とその居住性に関する研究

—その2. 斜面住宅地の建築レベルによる考察—

正会員 ○古川 陽平*
同 真境名 達哉**

斜面住宅地 高齢者 住環境要素

1.はじめに

前編より斜面住宅地において、店舗やバス停などの住環境要素と住宅の距離から住替希望を探ったが、本編ではさらに具体的に住民の日常の移動や交通の違い、居注意識の違いからもたらされる、定住・住替希望を建築レベルによる調査で探っていく。

2. 母恋町の居注意識

2-1. 住民の居注意識に関する分析

表1より、日常生活の「便利さ」に関しては住替希望者の割合が、“不便である”と答えた人は41% (56人中26人)である。次に「安心感」でみると、“不安だ”と答えた人は37%(38人中14人)となる。「愛着」については“気に入らない”と答えた人は36%(33人中12人)となっている。以上の結果で有意差をみると「便利か」の項目で有意差が見られた。これは定住希望者に比べ、住替希望者の方が日常の生活の中で不便さを感じている事が言える。

外出の有無や回数をみる(図1)。夏の外出の回数を見ると、週3~4回では32%(50人中16人)の住替え希望者が確認されたが、その他の項目では平均を超えたものは確認されなかった。また、外出の回数から有意差はみられず住替、定住希望者に関わらず同じように外出している事がわかる。

2-2. 日常の移動や、交通に関する分析

「買い物場所が歩ける所にあるか」についてみる。全体の127人中104人の82%の人が「ある」と答えているが、そこまでの距離が11分以上の時間がかかると答えた47人のうち44%の21人が住替希望者であり、有意差検定にかけると人数の偏りに5%有意差が見られ(表1)、住替希望と買い物場所までの距離には関連があると言える。

駐車場の有無を見ると(表1)、駐車場のない住居では住替希望者の割合が高く38%(47人中14人)であり、斜面地での主な移動の手段としての自動車の利用が考えられるが結果に有意差は見られなく、駐車場の有無と住替希望との関連はあまりあるとはいえない。

3. 建築レベルで見る住環境要素

3-1. 建築要素と住替希望

ここでは無作為に抽出した59件のアンケート回答者の

住宅を対象に実際に現地調査を行う(住替希望者は19件、定住希望者は40件である)。調査方法は外観から建築要素の把握を行い、その結果とアンケートによる住替希望と比較を行った。建築要素としては塀や生け垣、駐車場や庭等のバッファー空間、擁壁等の段差処理といった視線的なバリアとなりうる要素から住替希望者数を見る(図2)。

まず階段を用いてアクセスする住宅は16件あり、そのうちの60%(16件中9件)近くが住替希望者であることから階段が周辺関係としてのバリアとなっているようである。また、敷地と道路の境界線に擁壁や塀等によって主開口が遮られている場合を見ると、擁壁によって遮られている住宅が60%(20件中12件)となる。

建築要素から、直接確率計算を行うと、擁壁の有無に関しては1%有意差が見られ、道路側に主開口が向いているかどうかでは5%の有意差が見られた。建築要素と住替希望にも関連が見られる(表2)。

以上までの調査を行った住宅の典型例を図面として挙げる。またそれらの住宅が集まった住宅群の様子を例と

表1. 有意差検定の結果

質問内容	回答	住替希望	定住希望	両側検定(P値)	結果
買い物場所が歩ける範囲にあるか	10分以内	12人	39人	0.03338	5%有意性
	11分以上かかる	21人	26人		
駐車場の有無	ある	14人	23人	0.1932	有意性なし
	なし	22人	67人		
駐車場の有無 バス停より250m離れた場合	ある	12人	14人	0.1809	有意性なし
	なし	10人	26人		
日常生活は不便を感じる	不便を感じる	26人	38人	0.00471	1%有意性
	不便に感じない	6人	36人		
日常生活は安心である	不安を感じる	14人	24人	0.19854	有意性なし
	安心である	22人	67人		
現在の住まいを気に入っている	気に入らない	12人	21人	0.50613	有意性なし
	気に入っている	24人	59人		

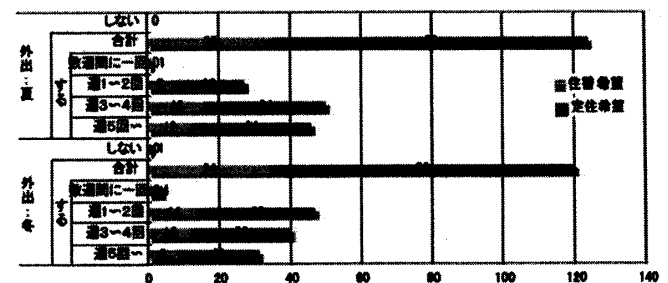


図1. 住民の外出

A study on the actual of dwelling environment and its livability in slope residential district of a cold region.

Part 2; Analysis by architectural element of slope residential quarter.

FURUKAWA Yohei, MAJIKINA Tatsuya

して写真に挙げる。(図4,5,6)

3-2. 周辺環境の違いによる住替希望

母恋の住替希望者と定住希望者を地図上にプロットすると、南町2丁目では住替希望者数の集中する場所(図3、以降母恋Aと呼ぶ)が見られ、一方で南町5丁目では定住希望者の集中する箇所(母恋B)が見られた。

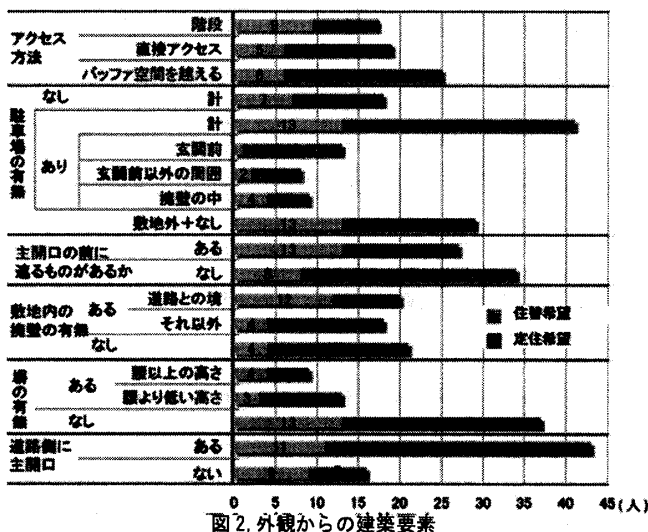
そこで母恋A、母恋Bの住民に対してヒアリングを行い実際の住民の生活の違いを把握する(調査方法は前編表2のヒアリングの項目参照)。質問内容は将来について、生活の上での周辺の利便性、周辺の近隣意識への満足度等で、22人から回答が得られた(住替希望者は13人、定住希望者は9人)。

まず住替希望者と定住希望者に将来の生活について窺うと両者ともに、車を手放す事による生活の変化について述べており、また両者の考えには違いがあった。定住希望者では「それまでは車を使った市内中心地での買い物から、近所のスーパー等になるだろう」と徒歩での移動を受け入れていたが、住替希望者の場合は、「将来歩く生活になったとしても遠いので不安だ」と述べており、考え方に違いを5人から聞くことができた。

また近隣との交流については、定住希望者は日常的に行われているとの答えに対し、一方で住替希望者も声をかける等の周辺住民等の交流に対して、積極的な姿勢が

表2. 直接確率計算の結果

条件		住替希望	定住希望	両側検定(P値)
擁壁の有無	道路との間にある	12人	8人	1%有意差 (0.00377)
	なし	8人	31人	
玄関へのアクセス方法	階段を上る	9人	7人	有意傾向がある (0.06119)
	それ以外	11人	31人	
主開口が遮られている場合	遮られている	13人	14人	有意傾向がある (0.05959)
	遮られていない	8人	26人	
道路側に主開口の有無	ある	11人	32人	5%有意差 (0.03495)
	なし	9人	7人	



窺えた。しかし住替希望者の中には「周辺住民が病気などで外に出ないので交流が十分に行えない」などの事に不満を感じているとも述べていた。

4. まとめ

これまでの調査により、前編で広域に斜面地を見るとバス停等の生活要素までの距離が住替希望に関わると予想を立てたが、アンケートの中から住民の意識としても商店までの距離で住替希望者数に差が出てくる事がわかり、斜面地であっても歩いて生活を送ることが大事な様である。

ヒアリングの中からも住替希望者は将来的な徒歩の生活に不安を感じているようであった。また、住替、定住希望者ともに近隣への交流に積極的であったが、住替希望者が多く見られる場所ではその交流が行われる空間として視線が通らない場合が多く見られた。

今後縮小していく斜面住宅地の中でも、外部に対して閉じた住宅は住替希望者の増加が考えられ、一方で開口の向きなどで外部に対して開いた住宅や徒歩圏内に住環境要素がそろった住宅は定住希望者が残り続け、斜面住宅地の将来の姿が窺えるだろう。

謝辞

室蘭市役所をはじめ、調査に協力していただいた母恋南町、北町のみなさまに感謝の意を申し上げます。

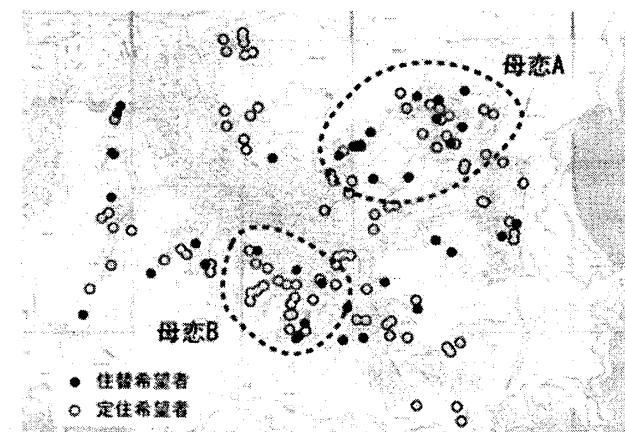


図3. 住替希望者の分布状況

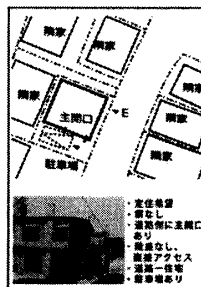


図4. 定住希望者

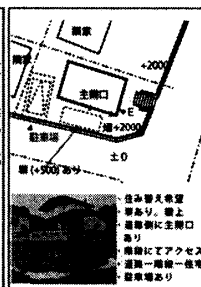


図5. 住替希望者

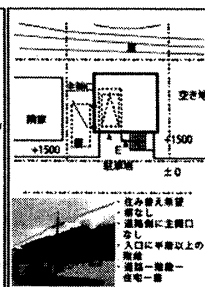


図6. 住替希望者

*鴻池組 修士 (工学)

**室蘭工業大学 くらし環境系領域 講師・博士 (工学)

*Konoikegumi Corporation, M.eng.

** Lecture Department of Civil Engineering and Architecture, Muroran institute of technology